



論 告 要 旨

傷害、準強姦

廣 野 秀 樹

右被告人に対する頭書被告事件についての検察官の意見の要旨は左記のとおりである。

平成四年六月二十九日

金 沢 地 方 検 察 庁

検 察 官 検 事

江 村 正 之

金沢地方裁判所 殿

記

第一 事実関係

本件各公訴事実については、取調べ済みの関係各証拠によりいずれもその証明は十

分であると思料する。

第二 情状

本件は、被告人が、同人を恐れ警戒していた被害者を強引に連れ出し、走行中の車内や人気のない場所に駐車した車内において、同女に対し一方的に多数回殴打し、逃げ出そうとした同女に更に強力な足蹴を加えて、昏倒させ、脳内出血の重傷を負わせたのに、単に暴行のため一時的に意識もうろうの状態にあるものと考えてその抗拒不能の状態に乗じて同女を強姦したというのであって、被害者の生命身体を軽視し、その意思の事由を踏みにじる誠に悪質な所為である。

二 本件受傷のため、被害者は極めて重篤な状態となり、手術治療によつて当面の死の危険は脱したもの、意思表示はほとんどできず寝たままの状態にあって、回復の見通しはついていない。何等の落度もないのに、被告人から目を止められ、同じ会社に勤務することから同人に対しては同僚として接しざるを得なかったばかりに、このような仕打ちを受け、健康な身体を奪われた被害者の心情はいかばかりかと察せられるのであって、その両親らの悲嘆の情も筆舌に尽くし難いものがあり、本件は被害者とその親族に対し死亡にも匹敵する苦痛を与えたものと言うべきである。

三 被告人は、被害者の意思を無視して一方的執拗に交際を強要し、些細なことで因縁をつけるなどして、本件犯行までに同女に多大の精神的苦痛を与えた挙げ句に、連れ

出した同女の態度が気に食わないとして、何等の抵抗もできない女性に対し執拗な暴行脅迫を加え、負傷して意識もうろう状態にある同女を自己の意のままにしようと更に強姦するという犯行に及んだものであって、このような身勝手極まりない本件犯行の経緯動機に酌量すべきところは全くない。これに対し、被害者に責められるべき落度はない。

四 本件は自首事案ではあるが、警察には被害者が負傷しているのに強姦行為まで行つた上ようやく出頭していること、同女の身体の異常が著しかったためおそれをなして出頭したものであること、自己が被害者と共に会社を出ていることは会社同僚らが熟知していることで逃れようがないことから出頭したものと認められること等の経緯からして、特段酌量すべき事情とは言えない。

第三 求刑

よつて、本件被告人の刑事責任は誠に重大と認められるので、これら諸般の情状を考慮し、相当法条を適用の上、被告人を懲役四年に処するのを相当と思料する。